

「がでにを練習ワーク」の解答から見たタイプ分けについて

葛西ことばのテーブル 三好純太

「がでにを練習ワーク」を、実際に用いて見ると、「問題に正解できるか」と、「日常会話で使えているか」によって、4つのタイプの子どもがいることが、わかります。以下、それぞれのタイプについて説明します。

I 問題に正解できない子ども

このグループの子どもは、さらに、つぎの2つのタイプに分けることができます。

問題の文(例えば「ハサミで切る」)を、



① 日常会話でも、正しく使えていない。

*「使えていない」とは、文で話せない・助詞がない(「ハサミ切る」)・助詞を間違えて使用している(「ハサミを切る」など)、などの状況を指す。



② 日常会話では、正しく使えている。

この二つのグループの子どもに対して、「がでにを練習ワーク」は、異なる学習意義を持つと考えられます。

まず、①日常会話でも正しく使えていない、という状況の子どもに対しては、助詞の存在への気づきを促し、さらに、助詞の正誤の比較を促すという、目的があります。問題への取り組みを通して、助詞に触れ、さらに、間違えるというプロセスを通して、助詞の異なりや種別への気づきを促します。

つぎに、②日常会話では、正しく使えている、という子どもについて。

なぜ実用できている助詞を、学習でも正解できるようにする必要があるのか、を考えることが重要です。このタイプの子どもは、自分の発話に対する洞察が未熟です。しかし、自分が運用している言葉を、客観的に把握し、分析できる能力がなければ、さらに高度な文法を学習することが困難です。多くの発達障害の子どもにとって習得の難しい、可逆事態の倒語文、授受構文、受動態・使役態などを学んで行くためには、“話せていることは、問題でもできる”ようになることが必要です。

II 問題に正解できる子ども

このグループの子どもは、さらに、つぎの2つのタイプに分けることができます。

問題の文(例えば「ハサミで切る」)を



① 日常会話では、正しく使えていない。

② 日常会話でも、正しく使えている。

ここで問題になるのは、①のグループの子どもたちです。学習課題の中では、正解できるものが、日常会話の中では、運用できていない原因を考える必要があります。外国語学習で習った文法が使えないように、知識のみが先行している場合が多いようです。知識を運用につなげていく練習を工夫する必要があります。

